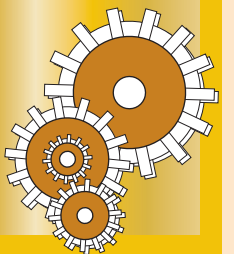


細見工業株式会社  
高いノウハウとチャレンジ精神が生み出す展示品の輝き  
美術館・博物館用展示ケース



認定品名 美術館・博物館用展示ケース

美術館・博物館用展示ケースは、展示品の見やすさだけでなく、気密性や防犯性、耐震性、使い勝手の良さなどさまざまな点に配慮して作られる。顧客の要求と機能性の双方を満たす展示ケースを製造するために、時には新たな技術の開発を行い、試行錯誤を繰り返すことも必要とされる。細見工業（株）の美術館・博物館用展示ケースは、長い経験と蓄積されたノウハウから生み出される、プロとしてのこだわりのある傑作である。全国各地の有名美術館・博物館に納入した実績が多いことから、その実力は折り紙付きであるといえよう。

profile

細見工業株式会社

所在地：葛飾区小菅1-11-20

電話番号：03-3838-2121

代表：細見大作

業種：金属加工業（美術館等展示ケース設計製造等）

従業者数：20名

ホームページURL：http://www.hosomi-kogyo.co.jp/



精力的でアイディアマンの細見社長

■全国各地の有名美術館・博物館へ納入、高い評価を得ている展示ケース

美術館や博物館に行くと、展示品だけでなく展示ケースも鑑賞する人はほとんどいない。展示ケースは、鑑賞するものではなく、展示物を鑑賞しやすいよう引き立たせる役割を果たしている。どちらかという無視された方がありがたいという存在、それが展示ケースなのである。現場だけ見る人は「ケースを持つてきて設置するだけ」としか見てくれませんと美術館・博物館用展示ケースを製造する細見工業の細見大作社長（37歳）は快活そうに笑う。「でも、私はケースというハードではなく、ソフトを売る楽しい仕事だと考えています。客先から言われたままにやるというような仕事ではなく、弊社の持つノウハウを提供する仕事なのです」。

細見工業は、これまで北海道から九州・沖縄まで、さまざまな有名博物館・美術館用の高級展示ケースを手がけてきた。仕事の85%が大手のディスプレイ会社からの受注だが、クライアントからの直請けの仕事も一部あり、商業施設・一般企業・大学などの展示ケースに限らず、店頭の仕事など、その種類も多岐に渡る。下請けの仕事の場合、ディスプレイ会社等のデザイナー等と打ち合わせしながら展示ケースの設計を固めていくが直請けの場合は、美術館や博物館の学芸員との調整で仕事を進める。「どんな設計にかを決めるまでがひと苦労です。担当者の要求を聞いた



大阪市立東洋陶磁美術館に納入した展示ケース

上で、弊社は専門的な立場から提案します。展示自体に対するノウハウは弊社の方がたくさん持っていますので」と細見社長。担当者、この段階でぶつかり合うことも少なくないという。

「その仕様にする展示自体が損なわれる」という場合には、その点をアドバイスさせていただきます。来場者の方が満足して鑑賞していただけるようなものにするのが私たちの仕事ですから。先方のいう通りやっていると、ムズに事は運びますが、自分たちとしては納得できない。展示ケースは、場合によっては20年から30年も使用されることがあります。そんな長い間後悔はしたくないですからね」。

■製造だけでなく、新技術に関わる実験も

展示ケースにはさまざまなタイプのものがあり、使用されている素材も、木や金属、ガラスなどさまざま。ケース内の照明器具なども、既製品が使えないことが多く、そのたびごとにオーダーして作る必要がある。「いろいろなものを扱いますので、それぞれに対する知識や加工技術が必要です。とくに弊社では、ガラスの接着技術に関心があり、研究を続け

ています」（細見社長）。大手ガラスメーカーの子会社の友人がおり、頻りに技術情報の交換を行う。互いの話の中で、社内で実験していることもある。

実際の実験現場を見せていただいた。大きなガラス板が小さなガラス板に貼られて吊りされている。「現在の接着剤の能力では、現在では使えるガラスの面積が限られているのですが、接着剤によってはその限度を広げられる可能性がある。そこで実際にやってみて、経年変化を調査しているのです」。より大きなガラスが使えれば、技術の幅がそれだけ広がる可能性がある。

細見工業の強みは、社屋内に、十分な天井高と広さを有する工場を持っていることで、プレス（スライドを上下に動かすことによりプレスする機械）、ベンダー（金属板などを曲げる機械）などの加工機械も保有し、さながら立派な鉄工所といった趣である。「いろいろな実験ができることももちろん、設計場所と製造現場が近いので、ちよつとした手直しでもすぐに対応できるのです」と細見社長。他社



工場の中はさながら広くてきれいな鉄工場という雰囲気

では、設計場所と製造現場が離れている所が多く、こうはいかない。都心に近く、高速道路も利用しやすいという立地上のメリットと合わせ、大きなアドバンテージとなっている。

### ■展示ケースの理想像に近い高度な要求に独自設計の特殊な丁番で対応

展示ケースの製造は、毎回異なる案件であり、固定的なノウハウを使い回すというのが困難である。いわば広範囲の技術対応力を必要とする仕事であるといえる。ところで、技術的に困難な案件に行き当たった場合、どんな形で対応するのか。この質問に対して、細見社長は、過去の事例について話してくれた。



「ある美術館の展示ケースを受注したときの事です。受注元のディスプレイ会社のデザイナーから、『観賞を損ねないよう、ケースの目地の部分など、余計な部分の線ができるだけ出ないような作りをして欲しい』という要求がありました。細見社長曰く、展示ケースの理想像は、『無色透明で、展示品が宙に浮いているように見える』ものだった。しかし、デザインを実現するには

種々の機能的な問題もある。

「展示品の品質を損なわないためには、温度と湿度の管理が必要です。温度は、美術館・博物館が室内の温度管理を行います。湿度は湿度です。展示ケース内には、湿度を安定させるために調湿剤（シリカゲルなど）が必ず入れられるのですが、外部から空気が流入する環境では、安定した調湿剤の効果が見込めないのです。このために気密性をいかに上げるかが重要な事です。展示ケースの気密性は、空気交換率で測ることができ、たとえば「0.3%以下」といった形で、指定されることも少なくない。試作品で専門機関に検査依頼することもあるという。

「セキュリティの問題も重要です。合鍵のない鍵を使用したり、外から鍵穴が見えないような工夫をしながら、鍵としての機能をしつかり果たすものにしなければなりません。さらに、展示替えなどのことを考えると、使い勝手のよさにも配慮しなければなりません。デザイナーの要求を満たし、かつこうした様々な条件を満たす展示ケースを検討していくうち、『扉を開けるのに、横にスライドさせながら手前に回転させる形にするしかないということになりました。かなり複雑な機構となるため、既存の丁番は使えません。そこで、丁番自体を自社で設計し、試作を繰り返ししました。完成したものは、多数の軸を有する複雑な丁番となりましたが、これを開発したことで、デザイナーの要求を満たす展示ケースを完成させることができたのです。やりがいのある仕事でした。」

その時に開発した丁番を見せていただいた。企業秘密に属することなので、ここに全体像を示すことはできない。多数の軸を有する、複雑な丁番である。よほど困難で苦しい仕事だったろうと思いきや、社長のそぶりではどうやら苦しくも十分に楽しい仕事だったようだ。

### ■全長15mの巻物展示ケースでは細く厚いケースを採用

もうひとつ、ある巻物の展示ケースの仕事のエピソードを社長は教えてくれた。

「ある美術館から、全長15mの巻物を広げて展示したい、気密性や展示替えのしやすさにも配慮したケースにして欲しいとの要望があり、既存製品では対応できないため、一から弊社で設計することになったのです。さまざまな検討の結果、長さ1.5mのケースを自由につなぎ合わせる方法を採用することにしました。この時、ガラスケース同士のつなぎ目をいかにして細くするかが大きな課題となりました。



商品ケースの部品を作っています

すが、その分ケースとしての強度が失われる。しなりが生じ、扉の開閉もしづらくなるという欠点が出てきます。



細見工業では、展示ケースのほか、展示会ディスプレイや店舗什器の製造も行っている。この写真は展示会ディスプレイを現場搬入する前に、不都合な点がないかどうかチェックするため工場内で仮組みしているところ

検討の末、20mmのケース枠を採用し、太くしない分、厚くすることで、顧客の要求に応じた展示ケースとすることができました。この例では、完成まで実験と試行錯誤を繰り返したそうである。この展示ケースは、府中市美術館や千葉県美術館などで使用され、雑誌等マスコミにもたびたび紹介された。

以上の二つの例のように、既存の技術では解決できない課題が生じたとき、新しい技術を生み出して解決してきたのが細見工業のやり方である。これまで生み出してきた技術の中には、パテントに値するものもあったようだが、「日々の案件に追われ、申請までは行っていない」そうだ。

### ■「技術的にチャレンジしがいのある面白い仕事が多い」「文化施設関連の仕事

細見工業は、社長の父である先代社長が葛飾区白鳥で50年ほど前に創業した会社である。板金職人であった先代社長は、瞬間湯沸かし器

のカバーなど、珪瑯の板金を主に行っていた。

昭和47年に、船の科学館の展示室内の装飾金型を受注したことをきっかけに、ディスプレイ業界に参入し、昭和50年には、熊本県立美術館の展示ケースの金属工事を受注。以後展示ケースの製作を本格化することになった。現社長は、大手ディスプレイ会社での修行を経て、平成7年に入社し、平成14年に弱冠31歳にして、先代を引き継ぎ社長に就任した。

展示ケースの仕事について、細見社長は、こう言う。「弊社は、美術館等の展示ケースのほか、展示会用ディスプレイの仕事や店舗什器の仕事もしています。展示ケースを含む文化施設関連の仕事は、その他の仕事よりも、金銭面で割に合わない部分があります。ただし、おおむね納期的に余裕があるうえ、技術的にチャレンジしがいのある面白い仕事が多いです。試作を繰り返すなど、じっくり取り組むことができるため、会社全体として技術的スキルを向上させる重要な役割を果たしているのです。バブル経済の時代に、ディスプレイ関連の仕事に重点を移せばもっと儲けられるはずだという時期がありました。そんな時でも文化施設関連の仕事も決してないがしろにしなかったのは、先代社長である父の先見の明によるところだったのだと今になってわかりました。」

### ■「psb(パブリックサービス)納得(なとく)くへものを」

社長の経営方針について聞いてみた。「み

んなのやりたいことをやる会社でしょう」というのが経営方針です。社員にもいつもそう言っています。弊社の希望は、大きな会社へと発展することではなく、ものづくりとして納得のいくものを作りたいということに尽きます。『ひとからやれといわれたからやっただ』というような仕事はしなないようにしようと社員にも強く指導しています。そんなやり方では、仕事そのものがつまらなくなるからです。ものづくりとして納得のいく仕事ができれば、何よりもよい社員教育となると考えています。」

社長も若い人が、社員にも若い人が多い。職安や職業訓練校、工業高校などから入社した人が多いという。「1人前になるのには10年は必要。長い目で育てていきたい。そしてさらにその先は、社内の組織化を図り、組織として協力し合うような会社になっていきたいと考えています」(細見社長)。平成17年にISO9001の認証を取得したのはその第一歩であり、あと5〜6年かければ、社長の願う形に成長できるだろうと考えている。

若く、チャレンジ精神あふれる社長と細見工業の今後を、期待して見守っていききたい。



社屋